巻頭言

昭和五十六年の年頭に立って

佐伯史談会長　高木嘉吉

年頭に立って、いつものことながら、初心に帰って過去を顧み、将来を望んで更に躍進を期せねばならぬと思っている。

史談会は発足以来二十余年を経過した。人生の年齢から考えたら、青年時代に入ったわけである。会は発展を続けて会員数四百に及んでいる。年の経過と共に新陳代謝も適当に行われている。何人かの得難い人が長逝して、幽明境を異にした。しかし後は若い人で補充されて、人材に事欠くことはない。近来婦人の加入者が多いのは生活が安定し、婦人の地位が向上したためであろう。

会はいくつかの柱を中心に運営されている。之は誰が主唱したわけでもないが、着実な歩みの中に自然に打ち建てられたものである。年頭に当って、初心に帰るためいくつかの項目をあげて、所感を述べることにする。

第一は足で確めることである。古い会員の足は、佐伯市・南海部郡の各所に隈なく及んでいる。物故された先輩郷土史家の業蹟は敬仰するところであるが、実地を踏査した点では私達の方が勝っていると、ひそかに自負している。佐伯惟治の足跡を尋ねて、三河内の各所を歩き廻ったが、先輩史家はそこまではしていないだろう。石神峠から尾高知までの、惟治一行の経路については、大友興廃記にも、栂牟礼実録にも何等記されていないが、私達は歩くことによって、長い苦難の道程を明らめ得たと思っている。

第二は日本史の流れに即して、郷土の動きを見ることである。文禄元年（一五九二）に豊臣秀吉が朝鮮に出兵したことは、郷土にも多大の影響を及ぼしている。大友義統の出兵に伴い、栂牟礼城第十四代の領主、佐伯惟定

も何百人かの部下を率いて渡鮮した。義統の失敗は秀吉の怒に触れ、豊後を没収されて豊後大友氏は亡んだ。惟定も佐伯との縁を絶たれ、藤堂高虎に随身して、宇和島・津と移り住み、津で波瀾万丈の生涯を終っている。惟定に従った佐伯人士は、その一部は惟定と共に津に移ったが、大部分は帰郷して、刀を捨て農に帰したとされている。私の少年時代、小学校其の他で秀吉の出兵は教わったが、郷土部隊の渡鮮については、何等教わるところがなかった。郷土部隊の出陣のことを教わっていたら、少年の郷土を見る目がちがっていたであろう。

第三に郷土史といっても時・処・位とも広範囲であるが、或る事について専門的な深い研究をしたいものである。会員の中には、「城郭研究」で既に名を成している者、「大友文書」の研究に精進している者、「郷土のキリシタン墓」の踏査を続けている者、「漁村の民俗資料の蒐集」に精出している者等、先に立って光を掲げる者が多く頼もしいことである。

益田学氏が多年にわたって集録した碑文を纏めて、『郷土佐伯の碑文』として出版されたこと、安部弥右衛門氏が、鶴見町羽出浦を中心に漁村の風俗を纏めた『羽出浦の歴史と民俗』を出版されたことは共に快心のことで両氏の労作に敬意を表する次第である。

第四に史談会は「奉仕」の行を積みたい。岡の谷の陸軍墓地の清掃や、植樹・樹木の肥培管理等はその一端であるが今後も続けよう。其の他史跡・文化財の保存保護にも積極的に取組みたい。

第五に四と関連して史跡・文化財等の顕彰にも努めよう。先年栂牟礼山頂に「栂牟礼城址」の碑石を建設したが、今年は城山山頂に国木田独歩の「春の鳥」を記念する碑を建てたいと思っている。

最後に人との「ふれ合い」を大切にしたい。会員の皆さんとは色々な催しに行を共にして「ふれ合い」の機会を持っているが、誰とふれ合ってもほのぼのと心温るものがあり、短い談話の中にも啓発されることが多い。

孟子は、「人の性は元来善なり」として性善説を唱え、悪に陥るのは、物欲が人々の心を陥溺せしめ、本来の善が物欲に掩われてしまうからだと説明している。会員との「ふれ合い」がさわやかなのは、物欲のない、善性がふれ合うからであろう。